

第3回 茅ヶ崎地区 防災“も”まちづくりワークショップ開催概要

1 開催概要

日 時	令和5年1月29日(日) 9:00~12:00
場 所	茅ヶ崎市役所本庁舎4階会議室1, 2
参加者数	約40名

2 プログラム

① 開催のあいさつ	茅ヶ崎地区まちぢから協議会 会長 <small>しろた よしゆき</small> 城田 禎行
② 第3回ワークショップの開催について	NPO法人 日本都市計画家協会 <small>うちやま すずむ</small> 内山 征
③ ワーク・ディスカッション	アクションプランの作成 防災“も”まちづくりマップの作成
④ 発表	
⑤ 全3回ワークショップを通したまとめ	茅ヶ崎地区まちぢから協議会 会長 <small>しろた よしゆき</small> 城田 禎行
⑥ 全体講評	東京大学生産技術研究所 <small>かとう たかあき</small> 加藤 孝明 教授
⑦ 閉会のあいさつ	茅ヶ崎地区まちぢから協議会 防災部会部会長 <small>さとう あきひろ</small> 佐藤 昭弘

3 ワークショップ内容

◆開催のあいさつ

11月からスタートしたワークショップも今回で最終回となります。

本日も内容が盛りだくさんですが、グループで力を合わせて、とりまとめをお願いします。

前回、加藤教授より、自分がやること、地域と連携してやることを考えてくるように宿題が出ておりました。この内容についても話し合ってください。今回のワークショップを区切りにして、結果をとりまとめたいと思いますので、よろしくをお願いします。



茅ヶ崎地区まちぢから協議会
会長 しろた よしゆき 城田 禎行 氏

◆第3回ワークショップの内容

第3回ワークショップは、これまで2回のワークショップで話し合ったことを踏まえて、とりまとめを行う回です。

グループワークでは、前半、後半にわけて意見交換を行い、その後、発表を行います。

【前半：まちづくりのキャッチフレーズ及びアクションプランの作成】

茅ヶ崎地区をどんなまちにしたいか、来年度からの活動が一体感を持ってスタートできるように、また、地区にお住まいの方に対するメッセージにもなるキャッチフレーズを考案します。さらに、地区の将来像に向けて、地域で進めていくべきまちづくり活動をアクションプランにまとめます。プランでは、その活動の効果、実施主体、時期を整理し、活動の中に込められた、「防災“も”」の効果についても整理します。

【後半：防災“も”まちづくりマップの作成】

第1回、第2回のワークショップと前半のグループワークで作成したアクションプランを集約し、すぐに取り組む内容とまちづくりの体制を1枚の図に整理します。



グループ区分

<グループワークの様子>



◆とりまとめる内容

●前半のグループワークでとりまとめる内容

第3回茅ヶ崎地区防災“も”まちづくりワークショップ グループ①
【まちづくりのキャッチフレーズ】

【アクションプラン～地域で取り組みたいこと～】

◆なにを？	◆どのような？	◆だれが？	◆いつ？(矢印を記入)	◆さらに？
まちづくりの取り組み内容	まちづくり上の効果	例)自治会/その他団体 まちから協議会...	短期 R5から 中期 2~3年後 長期 5年後	防災上の効果
	▶	▶	▶	▶

●後半のグループワークでとりまとめる内容

第3回 茅ヶ崎地区防災“も”まちづくりワークショップ ワークシート グループ① 防災“も”まちづくりマップ
【まちづくりのキャッチフレーズ】

◆グループワークのまとめ

魅力・強み		※第2回WS結果を再整理
まちづくりの課題		※第1・2回WS結果を再整理
防災活動の課題		※第1・2回WS結果を再整理

◆アクションプランのまとめ

取り組み内容	短・中・長
自治会	
まちから協議会	
その他	

●実施プログラム

※日5から始める活動の経緯を

●まちづくりの体制

※まちから協議会、自治会、商家防犯止ま、商店街、その他団体の関係性

※アクションプランを再整理



◆グループワークの発表

各グループがとりまとめた結果を発表し、他グループの参加者から質問を受けるなど、内容の共有と意見交換を行いました。

グループ①キャッチフレーズ：「世代、地域を越えた共創とまちづくり」

コロナ禍でイベントが出来なかったことを乗り越え、複数の自治会が連携して、体育祭のような多世代が参加するイベントができることを願って、キャッチフレーズを考えました。

アクションプランでは、自治会が中心となって、お祭りや野球、サッカー等の様々な団体と連携して、まちづくり活動を実施していきたいと思います。

令和5年度から始めることとして、合同イベントや一時避難所となるパークスクエアの見学会等を行い、課題として挙げた、パークスクエア前にある都市計画道路用地（三角地）の活用については、中・長期的（2～5年後）な取り組みとして、地域で話し合いながら検討したいと思います。短・中期（～3年後）の取り組みとして、イベントなどを通じて、若い世代と交流したいと思います。

これらの活動を行う体制は、矢畑南自治会とパークスクエア自治会による定期的な会合を行いながら、取り組みを進めたいと思います。

参加者・加藤教授との意見交換

複数の自治会の合同イベントは、他のグループでも意見が出ており、横のつながりが重要であるということがわかりました。

「共創」という言葉の中に、自治会単独から、地区全体で多様な主体が連携して、まちをつくりあげていきたいという思いが伝わってきました。

グループ②キャッチフレーズ：「まつりがつなぐ人づくり」

アクションプランでは、コロナ禍で実施することができなかった、納涼祭、秋祭りなどを再開し、中学生やマンション住民の参加を促したいです。多くの人に参加してもらうことで、多様な人々とのつながり、地域の一体感をつかっていきたいと思います。

この取り組みを進めるためには、各自治会や団体等のつなぎ役となる、まちぢから協議会が中心となって進めることが望まれます。



祭りなどの地域イベントを行うことで、将来、地域の担い手となる中学生等に参加してもらい、近隣の住民同士がコミュニケーションを取ることで、結果として防災“も”まちづくりに繋がることを認識してもらうことも大切だと思いました。

令和5年度から行う活動として、まずは、まちぢから協議会を中心に、まちづくりの方向性をとりまとめていただき、各自治会や各団体の活動にブレイクダウンしていくのが良いと思います。

参加者・加藤教授との意見交換

複数の自治会との連携や、マンション自治会と戸建て住宅地の自治会との連携は、災害を乗り越える上で、とても大切なことです。祭りのように、楽しく活動しながら、防災につなげる意識が重要です。

まちぢから協議会への期待が出されました。各自治会をまとめて、一定の方向性を示す、その上で、機動力、実効性のある体制にしていくことが望まれます。

グループ③キャッチフレーズ：「ワクワクつながるまちづくり」

地域内には、中央公園、工場、マンション、イオン等の商業施設など、多様な施設が立地していることが魅力です。

一方で、情報の共有や自治会の加入率が低いことが課題となります。

地域内にあるマンションと戸建て住宅地のメリット・デメリットをそれぞれ活かしていくことが必要と考えており、例えば、マンションは倒壊する心配が無いので、災害直後の避難場所として使わせていただく一方で、水道の復旧等が遅れることも考えられるので、戸建て住宅でお風呂に入れてもらうなど、連携していくことが重要だと思っています。



アクションプランとしては、自治会への加入促進、人材発掘を早急に進めたいと考えます。この人材発掘については、自治会単独ではなく、まちぢから協議会が協力して、茅ヶ崎地区全体で進める必要があると思います。

まちづくりの体制として、茅ヶ崎地区全体で、防災“も”“まちづくりを進める部会をつくり、活動を進める仕組みづくりをしていくことが必要と思います。

参加者・加藤教授との意見交換

お互いの長所を持ち寄り、短所を克服する視点がとても良いと思いました。

中央公園や市役所前広場などの地域資源を使ってイベント等を開催し、茅ヶ崎地区全体で、楽しいまちづくりを進めていければ良いと思います。

「ワクワクをつなげるまちづくり」については自分の自治会でも話し合いたいです。

グループ④キャッチフレーズ：「世代を超えて顔が見えるまち」

取り組みを進めるためには、自分でやること楽しく活動することが重要で、まずは、そのきっかけづくりが必要と考えました。

例えば、ドーナツづくりが得意なので、食べる、つくる会を立ち上げてドーナツを目的に集った人が顔を合わせ、繋がりを持つことで、災害時にも協力することができると思います。

仲間を増やしていくために、盆踊りを復活させることや、パタンクを体験してみること、無事ですカードの取り組みを広げていくほかに、LINEグループを活用するなど、情報を共有していく仕組みも大切だと思います。

コロナ禍で人が集まる機会が少なくなりましたが、さまざまな活動を再開し、防災意識を高めていくことが望まれます。

すぐに実施する活動は、イベントの復活、敬老会の開催、ドーナツをきっかけにしたネットワークづくりを進めたいと思います。



参加者・加藤教授との意見交換

イベントが再開され、ドーナツを楽しめる機会ができるといいなと思いました。小さな集まりからでもすぐに開始して、まずは、顔を合わせる機会をつくるのが重要だと思います。

また、このグループは、高齢者や障害者に対して、災害時に他の人を頼るだけでなく、自分でできる事を考えるという意見が出でいました。公助や共助の限界を知って、自助でできることを浸透させることは重要な視点だと思います。

グループ⑤キャッチフレーズ：「年齢性別関係なくやれることをやれる人がやる」

千ノ川沿いの桜やお店、遺跡を巡る散策コースを作って、まちあるきイベントを行い、その中で広域避難場所を確認するなど、災害に備えた防災“も”まちづくりにつなげていきたいと思っています。

また、マンション自治会と戸建て住宅地自治会が連携するために、まちちから協議会に、新しい体制づくりをお願いしたいです。

すぐに始めることとして、①まちあるきの企画・実施、②イベントの開催、③情報交換の順で進めていきます。



参加者・加藤教授との意見交換

「やれることをやる」という視点はとても重要であり、人それぞれ得意なことが違うので、それらを集めて上手く組み合わせれば、地域の力になると思います。

今後、まちづくりを進めていく上で、新しい体制を具体化していく必要があります。この体制づくりを進め、まずは「やれることをやってみる」といった視点が、重要だと思います。

グループ⑥キャッチフレーズ：「子どもも気軽につながり助け合えるあたたかいまち」

茅ヶ崎地区の中でも比較的地盤が高く、浸水に対しても安全性が高い地域のため、広域避難場所となっているTOTOの工場には、災害時に多くの人が集まる可能性があります。地域の特性を踏まえて、何ができるかを考えていきたいと思っています。

課題として、公園が少ないことや道路が狭い中で交通が激しいこと、マンション自治会と戸建て住宅地自治会の連携、自治会加入者の減少などに対応したまちづくりを進めていきたいです。

アクションプランとして、令和5年から夏祭り、一斉清掃、防災訓練などを実施したいです。また、近隣自治会と情報を共有する等、連携することを進めます。子どもは地域の宝なので、小さい子どもが参加できる取り組みを実施し、老人会のない自治会には、新たに老人会を設置して、高齢者の横の連携を図る取り組みを行います。

中長期的には、まちちから協議会の協力を得ながら、地域における利便性を向上するためポストや自動販売機、コンビニの誘致を考えたいです。



参加者・加藤教授との意見交換

小さい子どもをもつ親が、気兼ねなく会合等に参加できる環境を整えることも重要です。例えば、今回の会議のような機会でも、会場内に子どもの遊び場があれば、親は安心してまちづくりの話し合いに参加できます。多世代の交流を図る上では、このような気遣いも重要です。

◆全3回ワークショップを通したまとめ

今回、茅ヶ崎地区で取り組んだ防災“も”まちづくりワークショップですが、この結果をしっかりと次の活動に繋げていきたいと思えます。

各グループからの発表で、皆さまのまちから協議会への期待が大きいということ把握することができました。また、その役割も明確になりつつあることから、この活動の流れを絶やすことなく、来年度も続けていきたいと思えます。

まずは、来年度、みなさんに再度、集まっていただけ、グループごとのキャッチフレーズや検討結果を、茅ヶ崎地区のプランとして、まとめることから始めたいと思えます。また、今回のワークショップで、歩いたまち、また、グループで話し合ったことを忘れないでほしいと思えます。



茅ヶ崎地区まちづくり協議会
会長 しろた よしゆき 城田 禎行 氏

◆加藤教授の全体講評

今回のワークショップをきっかけに、茅ヶ崎地区において、防災“も”まちづくりがスタートします。このワークショップで何を話し合ったかを思い出していただき、平時や災害時の活動において、これまでのまちづくり活動がどういった位置づけを持つのか、検証することが重要です。

その上で、今回、作成したアクションプランのような新しい活動をスタートしていくのが良いと思えます。

来年度は、この地区でシンポジウムが予定されています。茅ヶ崎地区全体への周知、そして共有することで、共感して一緒に活動するメンバーを増やし、さらに新しいアクションに拡大していく、このようなスパイラルを描くことで、次の大規模災害を乗り越えられる地域の力が出来上がります。

今回、キャッチフレーズで出された「つながり」は必要条件となり、様々な方たちが連携した中で、必要なアクションをイメージしていくことが重要です。

年齢、性別、マンションと戸建て、住民と事業者や企業など、この地域の多様性を地域資源・持ち味として、いざというときに、連携して力を発揮できるよう、ひと、もの、空間、しくみ、若干の努力、愛、そして、今回提案された「ワクワク」を活用して、フットワークの軽い体制づくりをした上で、活動をスタートし、未来を目指していきましょう。



◆加藤教授が説明した資料

取り組みの目標

今回の多様なキャッチフレーズ

災害を難なく乗り越える

連携・つながり=必要条件

多様性

地区の多様性
担い手の多様化
地区の構成要素の多様性

持ち寄りの共助

異なる主体の
連携

地区間の連携

人、モノ、空間、しくみ
若干の根性、愛、
ワクワク感

フットワーク軽く！
⇒そのための体制



◆閉会のあいさつ

私自身は第2回ワークショップからの参加となりましたが、まちあるきでグループの皆様と話しながら地域内を見るなかで、この地域には様々な資源があることに気づきました。

また、今回の発表の中に、とても良い考えが多くあり、例えば、既にLINEグループをつくり、情報交換を始めようという具体的な動きがありました。

接点を持ち、つながりを強くすることは、地域の防災力を高め、活動の幅を広げることにもなるため、ぜひ、今回のワークショップで参加さ

れた皆様には、この出会いを大切に、今後の活動に活かしてもらいたいと思います。

以上で、計3回に渡る茅ヶ崎地区防災“も”まちづくりワークショップを閉会します。



茅ヶ崎地区まちぢから協議会

防災部会部会長

さとう あきひろ
佐藤 昭弘 氏